

ASEACCU の教育目標

協働を通して、よき隣人となる体験

田村俊輔

清泉女学院大学

ASEACCU and Its Educational Goal Be Good Neighbors through Cooperation with Others

TAMURA Shunsuke

Seisen Jogakuin College

本号最後の 3 編の記事は、ASEACCU と清泉女学院での教育に関連深い報告です。ASEACCU における協働の体験から、学生たちは何を学んだのか、この会合と学生キャンプを継続して開催しているアジアのカトリック大学は、何を目指しているのか。そして、清泉女学院大学での教育とどんな接点があるのか、以上の 3 点の間にヒントを提供してくれる報告です。これらの 3 点を統合するためには、若干の説明が必要でしたので、ASEACCU や清泉女学院での教育に詳しい方には「蛇足」となりますが、ここに解説を載せました。

ASEACCU は Association of Southeast and East Asian Catholic Colleges and Universities の省略形ですから、東南、東アジアカトリック大学連盟を意味します。実際には、オーストラリアの大学も含まれていますので、オセアニア地域も含む大学の連盟です。2018 年には第 26 回目の会合及び学生キャンプが 8 月 21 日から 26 日ま

での1週間、広島市にあるエリザベト音楽大学で開催されました。

今回は、オーストラリア、カンボジア、インドネシア、日本、韓国、フィリピン、台湾、タイの8か国、51の大学から学生教職員約200名が参加、**Catholic Education and Peace Initiatives**（カトリック教育と平和への取り組み）のテーマのもとに、活発な学びの場となりました。会期中にもたれた複数の講師による講義は、参加者に社会正義と平和について、心の平和と健康について考える機会を与えてくれました。

広島という被爆地におけるフィールドワークは、原爆投下から73年という長い年月を挟んでいるにもかかわらず、目の前でこの惨事が繰り返されているような思いを起こさせてくれる場を持つ厳粛さのなかで、原爆で亡くなった一人ひとりの生命のかけがえのない重さを感じさせてくれるものでした。

2018年8月、暑い夏でした。とりわけ、涼しい長野の夏を過ごしてきた清泉女学院大学から参加した4名の学生にとっては日常とは異なった広島の時間が流れていました。広島到着の日、ASEACCU 開幕までにしばしの時間的余裕があり、エリザベト音大の隣にある世界平和記念大聖堂を訪れました。聖堂は修復工事中で、壁の大部分はシートで覆われていましたが、入口には、どこの教会でもそうであるように、何種類ものパンフレットやお知らせのプリントが雑然と広げられていました。その中で、「焼き場に立つ少年」の写真がありました。戦火の中、焼き場で自分の幼い、すでに亡くなって、天に顔を仰向けている弟を背負い、順番を待っている少年の写真です。この写真を見た、教皇フランシスコが「戦争がもたらすもの」というメモを付けてカトリック教会に配布するよう指示したものです。広島では、原爆投下からずっと、この「戦争がもたらすもの」の記憶が残されていました。そして、その記憶を風化させまいと、つらい、忘れたいほどつらい体験を語り続ける人々がいました。

この時から、アセアック参加者一人ひとりがその記憶をたどることになります。

続く 3 編の報告と記録は互いに関連したものです。

柄澤さんの報告は、参加学生の眼から観たアセアック 6 日間の活動記録です。英語を母国語、または、公用語としている参加国はオーストラリアとフィリピン 2 か国だけですが、アセアックは、言語を異にした複数国からの参加者が協働して交わる場であるため、その共通言語としては英語が使用されています。清泉女学院大学は参加決定の時期が遅かったため、参加学生に対してこの英語で活動する数日間に向けての十分な準備をする期間はありませんでした。しかし、柄澤さんの記録にもあるように、コミュニケーションは言語だけではなく、コミュニケーションをする内容の問題でもあります。参加した学生が、そんな言語とコミュニケーションの 관계に気づきながら、毎日の課題をこなし、新たな人間関係を築いた 1 週間を振り返った記録です。異なった文化からこの広島に集まった学生が、ここで競い合うのではなく、協働することによって、一つの目標を達成するという体験をしている様子が報告されています。

アセアック開催中の 8 月 24 日に行われた参加司祭共同司式によるミサでの説教は、司式をされたサリ・アガスティン神父様から原稿とその掲載の許可をいただいたものです。この日のミサは、聖バルトロマイ使徒のミサ、朗読箇所は第一朗読ヨハネ黙示録 21 : 9-14、福音は、ヨハネによる福音書 1 : 45-51 でした。この朗読に対するサリ神父様の説教では、インドの「数の寓話」が紹介されました。サリ神父様の原稿は英語で書かれていますので、かいつまんで寓話のあらすじだけでも書いておきましょう。

0 から 9 までの数字が一堂に集まり議論を始めます。1 から 9 はそれぞれに付された価値(量的価値)があります。この量的価値という土俵において、0 は無価値です。まず、9 は 8 に向かって、「お前はわたしより価値が低い」と、自分を誇り、隣人である 8 を虐待しはじめます。9 から始まり、この隣人との比較は連鎖的に数字の低い方に向かって起こりました。さて、最後の 1 は無価値とされている

0 に向かって、何といったでしょうか。1 は 0 と比較して自分を高めることも、相手を貶めることなく、0 を自らの右に置いたのです。

サリ神父様の説教は、「あなた方がわたしのメッセージを理解してくれることを」という期待と促しの言葉で終わっています。

個別の量の比較からは必ず高低が生じます。そして、そこに量的価値の違いと、その違いからの価値判断が生じ、この数字の寓話で描かれているような人間関係が結果としてもたらされます。比較は自らを他者に対して開くことをさせず、自己中心的な世界観に人を押し込めてしまいがちです。わたしたち多くが暮らす毎日は、こんな論理で動いているようにも思われます。一方、関係性、または、協力から生ずるものは、個別間での比較からは得られない超越的な新たな価値と意味の創造だということでしょう。比較においては無価値とされていた 0 が、1 との協力により超越的な働きをするわけですから。

この数字の寓話は、アセアックが競争的な他者との比較を目的とする集まりではなく、ともに集まり、ともに過ごす時間を持つことから生まれる超越的な価値と意味の創造を目指していることを象徴的にあらわしているようにも思われます。

広島でのアセアック開催直前に、参加者、特に、学生参加者に向けて、アセアック本部から送られてきたパンフレットに、宿題をあらかじめやっておくような「準備はいらないから」このキャンプに「参加して、一緒に生活しましょう」といった趣旨のメッセージがありました。各大学で、英語力やコミュニケーション能力において「選抜」されてきたであろう代表の学生が、英語で行われる 1 週間のキャンプを前にして緊張していたことは確かです。そんな時、この数字の寓話が示すように「大切なものは比較ではなく協働」といったメッセージは、競争的な日本の大学生にとっては新鮮なものに映ったようでした。そして、1 週間のアセアックでの協働生活を通して創造した成果は、ここで培った人間関係を持続性のある、確固としたものにしてくれたようにも思われます。

次年度のアセアックの学生キャンプは韓国の西江（ソガン）大学

で開催されることに決まっていますが、大学での準備段階でも、この基本姿勢を伝える必要があるでしょう。

最後の報告は、山口道孝神父様に2コマ担当していただいている清泉女学院大学2年生の必修科目「清泉講座」の山口神父様ご担当分に関する報告です。これは、アセアックの活動とは直接関係していませんが、アセアックの伝える精神と共通点をもっていますので、ここに掲載いたしました。

山口神父様はこの報告書の表題を「無関心のグローバル化:『無実であるという錯覚』を乗り越えて」とされて、アジア、オセアニア、ヨーロッパ、南米の国々への支援活動に参加され、その経験を授業で話されている理由として、わたしたちの中に蔓延っている世界に対してのこの無関心という態度を倫理的な問題として伝える必要があることを挙げられています。

「数字の寓話」で示されているような比較と競争が、人々の中に自己中心的なこころの習慣を生み、他者に対しての無関心（時には直接的な虐待や迫害）と人々の間に深い疎外感を結果としてもたらしめているという図式が浮かび上がってきます。その図式の中に「無実ではない」ものを見たからには、わたしたちは、先ず、無関心から脱却しなければならないでしょう。学生たちは、今、世界で起こっているにもかかわらず、わたしたちが無関心でいたことを具体的に示されながら、清泉講座で学んでいます。そして、自分たちが積極的に向かい行って「よき隣人」になるということが、「誰が自分たちの隣人か？」という質問に先行しているというメッセージを世界で起こっている現実の中から受け取っています。

以上、それぞれが異なった内容と表現方法の3編に共通したものは、「よき隣人として協働する」重要性和他者と「協働する」ことで自らが「よき隣人となる」ことを示す例であり指摘でもあります。このメッセージは、まさに、フマニタス・カトリカのメッセージでもあると思うのです。